

失われた固有名詞を求めて — フレーゲからルソーまで —

1

固有名詞が行方不明

酒井智宏

- A** きみの家の猫だけどさ。
- B** 名前があるんだから名前と呼んでやってくれよ。
- A** 最近、人の名前が覚えられなくて。
- B** うちの猫は人なのか？
- A** むかし、うちに遊びにきていた野良猫が「性格の悪い人」って名前だったけど。フランス語だと *Mademoiselle la Méchante*。
- B** それは名前なのか？
- A** どういうこと？
- B** 「性格の悪い人」はふつうの日本語の単語を組み合わせてるだけだし、*Mademoiselle la Méchante* はふつうのフランス語の単語を組み合わせてるだけじゃん。
- A** 「ふつうの日本語の単語」とか「ふつうのフランス語の単語」って？
- B** ええと。そうだな、固有名詞じゃないってこと。*François Hollande* (フランソワ・オランド) は固有名詞だけど、*le président de la République* (共和国大統領) は固有名詞じゃないだろう？
- A** 固有名詞って？
- B** 頭大丈夫か？固有名詞ってのは「太郎」とか「タマ」とか「豊臣秀吉」とか、フランス語なら *François* とか *Félix* とか *Napoléon Bonaparte* のことだよ。
- A** きみこそ頭大丈夫か？ぼくが聞いているのは固有名詞の例じゃなくて固有名詞の定義。きみの好きな論理学のことばで言えば、固有名詞の外延の要素を挙げるんじゃなくて、固有名詞の内包を答えてくれってこと。「偶数ってなに」って聞かれて「2とか4とか6とかのことだ」って答えるんじゃなくて、「2で割れる数のことだ」とスマートに答えてほしいわけ。で、固有名詞ってなに？
- B** めんどくさいやつだな。固有名詞というのは、その名のとおり、特定のものを指す名詞のことだよ。そのものが固有にもっている名前と言ってもいい。
- A** 答えになってないね。固有名詞が「特定のものを指す名詞」というのはうそだ。*Marie* (マリー) は典型的なフランス語の固有名詞だけど、*Marie* さんなんてフランス語圏に何万人もいる。きみの気に入らないらしい *ton chat* (きみの家の猫) という表現は、

それとは反対に「特定のものを指す名詞」だろう？ だけど、きみの言い分では、これは固有名詞じゃない。

- B** 「特定のものを指す」というのは固有名詞であることの必要条件でも十分条件でもないってことか。
- A** そのとおり。それに、固有名詞が「そのものが固有にもっている名前」と言うことで、きみは墓穴を掘っている。「性格の悪い人」だって、*Mademoiselle la Méchante* だって、ぼくから見ればそのものが固有にもっている名前なんだよ。
- B** 「そのものが固有にもっている名前」というのでは、「性格の悪い人」と「タマ」がどちらも同じように固有名詞になってしまうわけか。うーん。この二つはなにがちがうんだらう。
- A** たいしてちがわないかもしれないよ。ドイツの数学者・論理学者・哲学者フレーゲ (1848-1925) は、「特定のものを指す」ということが固有名詞 (独 *Eigenname*) であることの必要十分条件だと考えた。哲学では「固有名」と言うほうがふつうだけど。
- B** フレーゲって…あのさ。これ、『ふらんす』の連載だよな？
- A** そう堅いこと言うなって。「ドイツ語から見たフランス語の不思議」とかいう連載も見かけたことあるし。でさ、フレーゲにとっては「モンブラン」(独 *der Montblanc* / 仏 *le mont Blanc*) も「ヨーロッパの最高峰」(独 *der höchste Berg Europas* / 仏 *la plus haute montagne d'Europe*) も同じく固有名だった。
- B** なんかいやだな。ぼくは区別したい。
- A** フレーゲだってまったく区別しなかったわけではないよ。『ふらんす』の連載だからフランス語の文で説明すると、*Pierre est monté sur le mont Blanc*. (ピエールはモンブランに登った) ということに同意する人が、*Pierre est monté sur la plus haute montagne d'Europe*. (ピエールはヨーロッパの最高峰に登った) に同意するとはかぎらないよね。
- B** 「*le mont Blanc = la plus haute montagne d'Europe*」を知らないかもしれないからね。
- A** そのとおり。それでフレーゲは、*le mont Blanc* と *la plus haute montagne d'Europe* は、指しているもの (独 *Bedeutung* / 仏 *référence*) は同じだけど、意義 (独 *Sinn* / 仏 *sens*) は異なると思った。だからこの二つの名前は意味がちがう。
- B** 意義ってなにさ？
- A** えっと、*le mont Blanc* と *la plus haute montagne d'Europe* では意味がちがうというときの「意味」のことかな。
- B** きみはそれで人になにかを説明したつもりなのか？

(さかい・ともひろ)

失われた固有名詞を求めて — フレーゲからルソーまで —

2

固有名詞から確定記述へ

酒井智宏

- A** フレーゲの「意義」ってのは研究者泣かせの用語らしいんだよ。ほくみみたいなひきこもりにはなおさらよく分からない。
- B** じゃあ知ったかぶりしてフレーゲの話なんか出さなきゃいいのに。『ふらんす』の読者に中途半端な知識をひけらかしたかっただけなんじゃないの？
- A** 固有名詞と固有名詞でないものの区別を考えるのに役立つと思ったんだよ。知識が中途半端なのは認めるけどさ。きみは「モンブラン」と「ヨーロッパの最高峰」がどちらも固有名だというフレーゲの考え方は変だと言うけど、最新の言語学の本だってそんなに代わり映えするわけじゃない。小田涼『認知と指示 定冠詞の意味論』（京都大学学術出版会、2012）では、ふつう固有名詞と呼ばれているものがなんの説明もなしに「定名詞句」のなかまに入れられている。
- B** 変な言いがかりはよせ。きみの悪い癖だ。その本の分類にはなんの問題もないよ。えっと、定名詞句ってのは、典型的には「定冠詞 *le / la / les* + 普通名詞」のことだね。これと文法的な性質が似ているものはすべて定名詞句と呼ばれる。定名詞句は、意味的には、特定のものを指すという特徴をもっていて、この点で不特定のものを指す不定名詞句とは異なる。不定名詞句というのは典型的には〈不定冠詞 *une / une / des* または部分冠詞 *du / de la* + 普通名詞〉で、これと文法的な性質が似ているものをすべて不定名詞句と呼ぶわけだ。構文的にも、定名詞句と不定名詞句はきれいな対称をなしている。その本から例を挙げると、*Il y a { ○ un chat / × le chat } près de la fenêtre.*（窓のそばに猫がいる）といった具合に、*il y a* 構文に現れるのは不定名詞句だけだし、反対に、*Je le connais, { ○ le président français / × un professeur de français }.*（私はその人を知っている。{ フランスの大統領を / あるフランス語の先生を }）といった具合に、文の右側にはみ出して使うことができるのは定名詞句だけだ。
- A** で、それらの基準によると、固有名詞は定名詞句のなかまであること。
- B** そのとおり。特定のものを指しているし、*il y a* 構文では使えないし、文の右側にはみ出して使うことができる。× *Il y a Marion dans la cuisine.*（台所にマリオンがいる）○ *Je la connais, Anna Faure.*（私はその人を知っている。アンナ・フォールを）だから固有名詞を定名詞句のなかまに入れることになんの問題もない。きみのお得意の言いがかりだ。

- A** あのさ、その本の分類に問題がないというのは分かるんだけど、それだと話が振り出しに戻るだけじゃないか？ たとえば *Félix*（フェリックス）は猫の固有名詞だけど、*Mademoiselle la Méchante*（性格の悪い人）はそうじゃない。きみはそう言ったはずだ。しかし、きみはいま、これらはどちらも定名詞句だと言っている。いったい、*Félix* と *Mademoiselle la Méchante* のちがいはどこにいったのさ。きみの言い分はけっきょくフレーゲから一步も前に進んでないんじゃないのかな？ さて、この二つはどちらがうのか、きみの考えを聞かせてもらおうか。
- B** えっと、特定のものを指すという点では同じか。なにがちがうかって言うと、えっと、えっと…ほくの考えを述べる前に、フレーゲの話に戻ろうか。
- A** あれほど『ふらんす』の読者がどうとか言ってたくせに。
- B** まあまあ。フレーゲは「モンブラン」と「ヨーロッパの最高峰」がどちらも固有名だと言ったんだったね。それで、その考えはその後否定されたの？
- A** うん、いったん否定された。しかしその後…ゆっくり順を追って話そう。固有名詞の機能が特定のものを指すことだというのはいいね。
- B** はい。
- A** だとすると、「固有名詞の意味 = 固有名詞によって指されるもの」という考えが出てくるのもいいね。「*Félix* ってなに？」って聞かれたら、「この猫のことです」って答えるわけだから、「*Félix* という固有名詞の意味 = この猫」。
- B** はい。
- A** では、もしもなにも指さない固有名詞があったら？
- B** その固有名詞は意味をもたない。というか、意味がないのだから、固有名詞ですらない。ただの音の列か、ただの文字の列にすぎない。
- A** そのとおり。で、きみは、*le président du Japon*（日本の大統領）とか *la présidente de la République*（女性の共和国大統領）とかが、ただの無意味な音の列だとか、ただの無意味な文字の列だとか思うか？ これらはなにも指していないけど。
- B** いや、意味はあるでしょう。だって、言ってることは分かるもの。
- A** だよな。「なにも指さないけど、意味はある」と言いたくなる。フレーゲはその「意味」を意義と呼んだわけだ。
- B** なるほど。前より分かるようになった。だけど、「意義」というのは評判が悪いんだよな？ 「意義」なしですまそうとしたらどうなるのかな？
- A** そこで登場するのが「確定記述」。フレーゲの「固有名」は、ふつうの「固有名詞」のほかに、後に「確定記述」と呼ばれるようになるものを含んでいる。

(さかい・ともひろ)

失われた固有名詞を求めて — フレーゲからルソーまで —

3

確定記述はなにも指さない?

酒井智宏

- B** 確定記述って？
- A** フレーゲが固有名と呼んだものなかには「なにも指さないけど、意味はある」ような表現が含まれている。前回見た *le président du Japon* (日本の大統領) とか *la présidente de la République* (女性の共和国大統領) とかがそれだ。これらの表現を N とすると、N については、「N の意味 = N によって指されるもの」が成り立たない。
- B** そういう、なにも指してない N のことを確定記述って言うの？
- A** いや、なにかを指してもいい。*le président du Japon* (日本の大統領) と *le président de la République* (共和国大統領) では、前者はなにも指さないけど、後者はなにかを、具体的には François Hollande (フランソワ・オランド) を指してる。でも、文法的には *le président du Japon* と *le président de la République* は同じ作りをしていて、特に区別する理由はない。そこで、イギリスの数学者・哲学者ラッセル(1872-1970) は、たとえば *le président du Japon* がなにも指してないなら、なにかを指してるように見える *le président de la République* も、実はなにも指してないんじゃないかと考えた。そして、こういう、唯一のものを指しているように見えながら、実はなにも指していない表現のことを確定記述と呼んだ。典型的には〈定冠詞 + 単数名詞〉。*la plus haute montagne d'Europe* (ヨーロッパの最高峰) も確定記述ってことになる。
- B** あのさ、いまさら『ふらんす』がどうか言うつもりはないんだけど、ラッセルってトンデモ系の人じゃないの？ だって、*le président de la République* とか *la plus haute montagne d'Europe* はあきらかになにかを指してるじゃん。
- A** いや、それが、指してないんだ。固有名詞と確定記述がどちらもなにかを指す表現だと仮定しよう。これらを N とすると、「N の意味 = N によって指されるもの」ということだ。この仮定から矛盾が出てくれば、この仮定はまちがっていたということになる。背理法という証明の仕方だね。それで、*Le mont Blanc est la plus haute montagne d'Europe*. (モンブランはヨーロッパの最高峰だ) という文を考えてみる。この文が「*le mont Blanc* が指しているもの = *la plus haute montagne d'Europe* が指しているもの」という意味を表すのはいいね。
- B** はい。「N の意味 = N によって指されるもの」と仮定したからね。
- A** ところが、そこから話がおかしくなる。「*le mont Blanc* が指しているもの」と「*la plus*

haute montagne d'Europe が指しているもの」は、どっちもフランスとイタリアの国境あたりにあるあの山だよ。あの山を m とすると、この文はけっきょく「m = m」という当たり前のことを言っているにすぎなくなる。

- B** でも実際は、*Le mont Blanc est la plus haute montagne d'Europe*. という文は当たり前のことを言っていないよね。人々が一生懸命にヨーロッパじゅうの山の高さを計測して、それでやっと分かったことなんだから。
- A** そのとおり。だから「*la plus haute montagne d'Europe* の意味 = m」という仮定はまちがっている。「*le mont Blanc* の意味 = m」のほうはいいとしてもね。*le mont Blanc* はまちがいがなく固有名詞だから、たしかにあの山を指しているでしょう。
- B** じゃあ、*la plus haute montagne d'Europe* は m 以外のものを指しているということかな？
- A** いや、それだとモンブランがヨーロッパの最高峰でないことになる。
- B** あ、そうか。ってことは、「*la plus haute montagne d'Europe* の意味 = m」も、「*la plus haute montagne d'Europe* の意味 ≠ m」も成り立たない。m を指してもいないし、m 以外を指してもいない。おかしいじゃん！
- A** いや、おかしくない。そこにはうまい抜け道がある。*la plus haute montagne d'Europe* がなにも指していないと考えればいいんだ。実際ラッセルはそう考えた。固有名詞を使った *Pierre est monté sur le mont Blanc*. という文は「ピエールは m に登った」という意味だけど、確定記述を使った *Pierre est monté sur la plus haute montagne d'Europe*. は「ピエールは m に登った」という意味ではないと。
- B** じゃあどういう意味？
- A** 「ヨーロッパでいちばん高い山がただ一つ存在し、ピエールはそれに登った」という意味。もう少しマニアックに言えば、「『x は山であり、x はヨーロッパにあり、x はヨーロッパでいちばん高い』、そういう x がただひとつ存在し、かつピエールは x に登った」ということ。x が m であるかどうかはこの文の意味には関係ない。ただこれらの条件を満たす x があればそれで OK。その証拠に、この長い言い換えの中に m が一度も登場しないでしょ？ *la plus haute montagne d'Europe* がなにも指していないというのはそういうこと。
- B** 固有名詞は特定のものを指しているけど、確定記述はなにも指していないと。
- A** そう。きみが名前ではないと言う *Mademoiselle la Méchante* (性格の悪い人) は確定記述で、実はなにも指していないのかもしれない。だから名前としては失格であると。
- B** いや、そこまで言うつもりはないんだよ。*Mademoiselle la Méchante* だって、やっぱりなにか指してるでしょう。名前と呼べるかどうかは別として。

(さかいともひろ)

失われた固有名詞を求めて — フレーゲからルソーまで —

4

ふたたび固有名詞が行方不明

酒井智宏

- A** 話がこみいつてきたので、ここまですべてをまとめてみようか。きみは *Mademoiselle la Méchante* (性格の悪い人) が固有名詞ではないと言いだした。じゃあ、固有名詞ってなんだろうと。特定のものを指す表現というだけでは、固有名詞ではない *le président de la République* (共和国大統領) と、あきらかに固有名詞である *François* (フランソワ) が区別できなくなる。フレーゲはそれらを区別しなかったし、最新の言語学の本にもそれらのちがいははっきりとは書かれていないけど、きみとしてはそれらを区別したい。そこでラッセルの記述理論が登場する。記述理論によると、特定物を指すとされる表現には固有名詞と確定記述があって、固有名詞は実際に特定物を指してるけど、確定記述は実はなにも指していない。たとえば *Félix* は特定の猫を指すけど、*Mademoiselle la Méchante* や *ton chat* (きみの家の猫) は確定記述で、実はなにも指していないというわけだ。
- B** やっぱりそれは言いすぎだと思うんだ。ほくが言いたかったのは、*Mademoiselle la Méchante* も、*ton chat* も、なにかを指してはいるけど、その指し方が固有名詞とはちがうということ。ラッセルをトンデモ系学者とまで言うつもりはないけれど、確定記述がなにも指していないというのはやっぱりおかしい気がするよ。
- A** 記述理論に反して、*le président de la République* (共和国大統領) が特定の人物を指す表現だとしようか。そうすると、同じ作りをしている *le président du Japon* (日本の大統領) も、なにかを指さないといけなくなる。日本に大統領はいないのにね。実際、この表現がなにかを指していると言った人もいる。オーストリアの哲学者マイノング (1853-1920) は、*le président de la République* も、*le président du Japon* も、同じように「ある」(仏 *subsister*) と考えた。そして、*le président de la République* のほうは、「ある」だけでなく、「存在する」(仏 *exister*)。 *le président du Japon* のほうは、「ある」だけで、「存在しない」。もともとラッセルの記述理論はこのマイノングの考えを退けるために登場したものだだったんだ。仮にすべての確定記述がなにかを指すとなると、マイノング主義に舞い戻ることになるけど、それでいい？
- B** それもいやだな。この場合の「ある」ってのがどういうことなのかよく分からないけど、確定記述がすべてなにかを指すとなると、*le carré rond* (円い四角) も「ある」

ことになるでしょう？ *le président du Japon célibataire* (独身の日本の大統領) も、*le président du Japon marié* (既婚の日本の大統領) も同じように「ある」ことになる。仮にいたとしてもひとりしかいないはずの「日本の大統領」が、未婚で、かつ既婚でもあるなんて、おかしいよ。

- A** でしょう？じゃあやっぱり確定記述はなにも指さないんだよ。
- B** どうしてそう極端に走るかな。なにかを指す確定記述もあれば、なにも指さない確定記述もある。それでなにがいけないの？
- A** ははは。極端に走るのはラッセルの得意技だからね。極端ついでに、記述理論を使うと、実は肝心の固有名詞も蒸発してなくなってしまふんだ。ラッセルは次のように考えた。(1) 確定記述はなにも指さない。(2) われわれが固有名詞だと思っているものは実は確定記述である。(3) それゆえ、われわれが固有名詞だと思っているものは実は固有名詞ではなく、なにも指していない。
- B** なんかつごいねえ… (1) は前回説明してもらったけど、(2) はどういうこと？
- A** 理屈は前回の *Le mont Blanc est la plus haute montagne d'Europe*. (モンブランはヨーロッパの最高峰だ) という文と同じ。復習してみようか。この文の意味が「*le mont Blanc* が指しているもの = *la plus haute montagne d'Europe* が指しているもの」だとすると、この文は $m = m$ という内容のない文ってことになってしまう。そこから、「*la plus haute montagne d'Europe* の意味 = m 」はまちがっていて、確定記述 *la plus haute montagne d'Europe* は実はなにも指していないという結論が出てくる。今度は固有名詞をつなげた *Émile Ajar est Roman Gary*. (エミール・アジャールはロマン・ガリだ) という文で同じように考えればいい。
- B** エミール・アジャールってだれだっけ？
- A** 1975年にゴンクール賞をとったフランスの作家。…だと思われていたけど、実は1956年にゴンクール賞をとったロマン・ガリと同一人物であることが死後に判明する。それで、二度ゴンクール賞をとった唯一の作家になった。
- B** なんかいやな予感がしてきたぞ。*Émile Ajar est Roman Gary*. の意味が「*Émile Ajar* が指しているもの = *Roman Gary* が指しているもの」だとすると、この文は $g = g$ という内容ゼロの文になる。しかし、実際にはこの文は内容たっぷり、フランス社会に大きな衝撃を与えた。だから、「*Émile Ajar* の意味 = g 」「*Roman Gary* の意味 = g 」はまちがっていて、固有名詞 *Émile Ajar* および *Roman Gary* は実はなにも指していないという結論が出てくる。
- A** ご名答。ラッセルは実際そう考えた。われわれが固有名詞だと思っているものは実は固有名詞ではなく、確定記述にすぎない。だから、なにも指していない。

(さかい・ともひろ)

失われた固有名詞を求めて — フレーゲからルソーまで —

5

確定記述から固有名詞へ

酒井智宏

- B** 「われわれが固有名詞だと思っているものは実は固有名詞ではなく、確定記述にすぎない。だから、なにも指していない」ですか。シュールすぎてついていけないね。だいたい、固有名詞が確定記述って、どういうこと？
- A** 「Émile Ajar (エミール・アジャール)の意味 = g」「Roman Gary (ロマン・ガリ)の意味 = g」というのはまちがいで、たとえば「Émile Ajar = 『Émile Ajar という筆名で1975年にゴンクール賞をとったフランスの作家』という確定記述の省略」「Roman Gary = 『Roman Gary という筆名で1956年にゴンクール賞をとったフランスの作家』という確定記述の省略」ということ。この調子ですべての固有名詞が確定記述に還元される。フレーゲはすべては固有名だと言ったけど、ラッセルは逆にすべては確定記述だと言った。こうして、固有名詞はみごとに蒸発してなくなりましたとき。
- B** それ、意味なくない？ ぼくたちが議論していたのは、特定のものを指す表現、たとえば「モンブラン」と「ヨーロッパの最高峰」のうちで、前者だけが固有名詞だと感じられるのはなぜか、ってことだね。それなのに、「実は固有名詞なんてものはありませんでした」じゃあ答えになってない。
- A** ラッセルも固有名詞なんてどこにも存在しないとまでは言ってないよ。確定記述に還元できないような表現を探せばいい。つまり、「モンブランという名前である」とか「ヨーロッパでいちばん高い」とか「1956年にゴンクール賞をとった」とか、そういう記述をいっさい含まず、そういう記述に還元もされず、そのものズバリを指す表現があれば、それが真の固有名詞だ。
- B** そんなものあるの？
- A** ラッセルは *this* とか *that* とかが真の固有名詞だと考えて、「論理的固有名」と呼んだ。たとえば「これ」がたとえ幻覚だとしても、幻覚自体は確かにそこにあるよね。そういう特定のものをズバリ指す「これ」こそが論理的固有名だ。
- B** やっぱりついていけないね。だって、*this* とか「これ」とかって指示代名詞じゃん。ぼくが考えたいのは、「なにを真の固有名詞と呼ぶべきか」ではなくて、「われわれが固有名詞だと思うものはどう定義されるか」ってこと。ラッセルがいくら Roman Gary は真の固有名詞ではないと言っても、ぼくににとって Roman Gary はあきらかに固有名詞だもの。きみにとっても同じだろう？

- A** 御意。これ以上ラッセルにつきあうのはよそう。だけど、もともときみがフレーゲの考えを知りたいと言って、この話になったんだからね。さて、「われわれが固有名詞だと思うもの」とはなにか。そろそろきみの考えを聞かせてもらおうか。
- B** フレーゲとラッセルの話も無駄ではなかったよ。やっぱり確定記述と固有名詞のちがいが鍵になるような気がする。たとえば、固有名詞は決まったリストから選ばれることが多いよね。Pierre (ピエール)とか Marie (マリー)とか。
- A** 定義なんだから、「ことが多い」じゃだめ。欧米人の名前はそれでうまくいくかもしれないけど、たとえば日本では「キラキラネーム」が日々作られている。
- B** 固有名詞には冠詞がつかないというのは？
- A** だめ。le mont Blanc (モンブラン)が固有名詞だと言ったのはきみじゃないか。それに、ドイツ語では Ich bin {○ Thomas / ○ der Thomas}。(ぼくはトーマス)みたいにありふれた固有名詞にも定冠詞がつくことがある。逆に、ラテン語や日本語には冠詞がないから、ラテン語や日本語には確定記述がないってことになる。
- B** そうか、どの言語にもあてはまる定義にしないとね。フランス語だと Il y a trois Marie dans la classe. (クラスにマリーが3人いる)とか les Dupont 「デュボン家の人たち」みたいに、固有名詞の複数形には s がつかないけど、これもローカルルールだね。どの言語にもあてはまると言えば、固有名詞って翻訳しても音があまり変わらないんじゃない？ président は日本語で「ダイトウリョウ」だけど、Hollande は「オランダ」のままだね？
- A** それは固有名詞の重要な特徴だとは思いますが、定義にはならないんじゃないかなあ。Kremer (クレメール)ってだれだと思う？ フランドル生まれのこの人、後に自分の名前をラテン語に訳して Mercator (メルカトル)と名乗った。メルカトル図法のメルカトル。「商人」ってこと。ドイツ語に訳したら Kaufmann (カウフマン)になってただろうね。
- B** じゃあ、「固有名詞は大文字で書きはじめる」というのはどう？
- A** きみは日本語で大文字が書ける超人か？ それに、ドイツ語の名詞はぜんぶ大文字で書きはじめる。試験に Nebel って出てきたから、「ネーベル」という名前の人だと思ったら「霧」だったってことがある。逆にフランス語だと、le petit prince (星の王子さま)って、小文字で書かれても固有名詞って気がしないか？
- B** たしかに…そうだ、こういうときこそ、ほこりをかぶってる『フランス語学小事典』(駿河台出版社)を引いてみよう。「固有名詞」は載ってないけど、「確定記述」は載ってる。「唯一の対象を指し示すために用いられる記述のこと」だって。いまさらだけど、この「記述」ってなんだろう？
- A** なるほど！ それ、意外とほこりのもてる事典だね。だれが書いたんだっけ？

(さかいともひろ)

失われた固有名詞を求めて — フレーゲからルソーまで —

6

固有名詞の条件

酒井智宏

- A** あのさ、みにくいアヒルの子 (le vilain petit canard) ってアヒルだっけ？
- B** アヒル (canard) じゃなくて白鳥 (cygne) でしょう？
- A** それでも「みにくいアヒルの子」と呼ばれる。モンブランは雪が解けてもモンブランでしょう。Le mont Blanc n'est plus blanc. (モンブランはもう白 [= ブラン] じゃない) なんてね。「田中さん」に対して、「あなたは田中さんじゃない。だって田んぼの中に住んでないから」なんてのは冗談にもならない。つまりさ、固有名詞はなんにも記述してないんだよ。le président de la République は必ず大統領だけど、le vilain petit canard はアヒルであるとはかぎらない。le Chat botté (長靴をはいた猫) なんて名前のほうが例外的だ。Table という名前の猫がいてもいいし、「性格の悪い人」という名前の性格のいい猫がいてもいい。
- B** Stein さんや Pierre さんは石じゃないもんね。
- A** ときどき C'est Pierre. を「これは石です」と訳してる答案を見かけるけどね。
- B** ははは、ピエールさんが本当に石だったら、まさに「名は体を表す」だ。でも、Jack l'Éventreur (切り裂きジャック) なんかはどうかだろう。切り裂かない「切り裂きジャック」なんて変じゃない？
- A** そういえば、きみの家の猫だけどさ。
- B** そうだ、その話から固有名詞の話になったんだ。うちの猫がどうした？
- A** ある日人間のことばを話しはじめたとするよね。
- B** いまでも話してるよ。
- A** ええと、ぼくには人間のことばには聞こえないんだけど。
- B** 心のきれいな人にしか分からないのさ。
- A** 分かった分かった。きみの家の猫が、心がきれいじゃない人にも分かるような人間のことばを話しはじめたとするよね。
- B** うちの猫は心がきれいじゃない人には話しかけないよ。
- A** いいから聞いて。そのとき、きみの猫が最初に口にするこぼはなんだろう？
- B** ご主人さまこんにちは。
- A** その「ご主人さま」というのは固有名詞だろうか、それとも確定記述だろうか？
- B** もちろん固有名詞さ。うちの猫は毎朝ぼくにだけ新聞を運んでくれるんだ。

それはどうかな。きみはその猫より先に死んだとするよね。

- B** 殺すなよ。
- A** じゃあ猫を先に殺そうか？
- B** やめてくれ。分かった、ぼくが死ぬよ。で？
- A** 新しい飼い主に引き取られたとする。猫は「新しいご主人さまこんにちは」ってあいさつするんじゃないかな。そのとききみは「古いご主人さま」。こうして、「ご主人さま」は le président de la République (共和国大統領) と同じく代々の人々を指すことになるから、固有名詞ではなくて確定記述ってことになる。
- B** でもさ、その「古いご主人さま」というのは固有名詞じゃないの？
- A** きみが生き返って、ふたたび飼い主になったとする。きみの猫はきみに「古いご主人さまこんにちは」ってあいさつする。
- B** ぼくは、古くない、ふたたび新しいご主人さまなのに。
- A** とはい聞かせても、猫が「古いご主人さまこんにちは」とあいさつし続ければ、そのとき「古いご主人さま」は立派な固有名詞になったということだ。
- B** 「みにくいアヒルの子」と一緒か。アヒルじゃないのにアヒル。
- A** 逆に、猫が「あ、そうか、まちがえた、新しいご主人さまだ」と言ったら「古いご主人さま」はまだ確定記述だったということ。「切り裂きジャック」も同じで、「切り裂かない切り裂きジャック」が矛盾だと感じられなくなってはじめて「切り裂きジャック」は一人前の固有名詞になるんだと思う。むかしドネランとクリプキという二人の哲学者が論争して…あれ？なに読んでるの？
- B** ルソー『人間不平等起源論』。
- A** あれま。最後の最後で急に『ふらんす』の連載らしくなったね。ありがとう。
- B** どういたしまして。この本、前に読んでよく分からなかったところがあったんだ。ルソーは人類が最初に手にした名詞は固有名詞だと言ってるのに、別の箇所では未開人は自分の子どもの顔さえ覚ええないと言ってる。自分の子どもさえ認識しない人間がどうして固有名詞を使うことができるんだろうとずっと疑問だった。ルソーがまちがってるのか、それともぼくの理解不足なのか。
- A** で、今日、ぼくと話して答えが分かったと。
- B** そう。ルソーは固有名詞のなんたるかを半分しか分かってなかった。
- A** こりゃまた大きく出たね。じゃあきみのご高説をうかがうとしようか。
- B** その前に、うちの猫の名前を思い出してくれたかな？なんかさ、名前を覚えてもらえないのって悲しいよね。
- A** ぼくにしてみれば、覚えなくても特に不都合はないんだけどね。
- B** ルソーが見落としていたのはまさにそこだ。 (さかいともひろ)